

青 眼 白 頭

○後生を口にする可こと、一派の癖のやうになりぬ。陸に汽車あり、海に汽船あり、今や文明の世の便利を主とすればなるべし。何故といはんも事あたらしや、お互に後世に於て、鼻突合はず憂なければなり。憂は寧ろ、虞に作るをよしとす。

○仰有る通り皆後世に遣りて、後世は一々これが批判に任せざる可からずとせば、なりたくなきは後世なるかな。後世は應に塵芥掃除の請負所の如くなるべし。

○おもふがまゝに後世を輕侮せよ、後世は物言ふことなし、物言ふとも諸君の耳に入ることなし。

○天下後世をいかにせばやなど、何彼につけて呼ぶ人あるを見たる時、こは自己をいかにせばやの意なるべしと、われは思へり。

○人無茶苦茶に後世を呼ぶは、猶救け舟を呼ぶが如し。身の半は既葬られんとするに當りて、せつばつまりて出づる聲なり。

○識者といふものあり、都合のいゝ時呼出され

ず、わるい時呼出さる。割に合はぬこと、後世に似たり。示教を仰ぐの、乞ふのといふ奴に限りて、いで其識者といふものの眞に出現すとも、一向言ふ事をきかぬは受合也。

○僅に三十一文字を以てすら、目に見えぬ鬼神を感ぜしむる國柄なり。況んや識者をや。目に見えぬものに驚くが如き、野暮なる今日の御代にはあらず。

○今人は今人のみ、古人の則に従ふを要せずと。尤もの事なり。後人亦斯く言はんか、それも尤もの事なり。

○さまざまなる世に在りて、いづれを上手と定めんは、いと難し。執れを下手と定めんは、いと難し。上手を定めんよりも、下手を定めんは一層難き事なり。

○長く所謂素人たれ、黒人たる莫れ。技やよしあしの何は問はず、黒人は存外まづいものなり、下手なものなり、いやでも黒人となり

て、其處に衣食するに及べば、已に早く一生の相場は定まれるものなり。之を素人より見るに、黒人ばかり物知らぬはなし、辨へぬはなし。

○染めて返らぬ黒人が身は、進退共に二度つづ、足を洗はざる可からず。素人は自在也。

○志は行ふものや、思ひき君よ、そは飢に奔るに過ぎず。志は唯草を蒔いて、なるべく高聲に語るに止むべし。生半なる志を存せんは、存せざるに如かず。志は飯を食はず事なければなり。志は缺くも、飯は缺くを得ざればなり。

○さりとも志を棄てんは惜しき時一策あり、精々多く志を仕入れて、處嫌はず之を振廻さん事なり。成功を見ずと雖も、附け肩けを見ん。背負切れざる程なるをもて、志の妙となす。此れにも入るべし、彼れにも加はるべし、推移するに憚らざるが故に、さてなんん々今を聖代と稱す。

○丈夫四方志、と唐人の言ひけん、こは恐らくは八方の誤りなるべし。

○志を抱いて死す、さもしからずや。一般字典の訓ふる所によれば、大丈夫は男の義なり、女を抱いて死せんのみ。何で死んでも廣告代

は同額也。

○英雄を罵る、快事たり。美人を罵る、亦快事たり。されども共に、錢なき時の事なり。

○儲して憤せざる可けんやと、息巻荒き人の聲の、墓口の中より出づるものならぬは、今に於てわれの確信する所なりと雖も、曾て燕趙悲歌の士多してふ語をきける毎に、定めしお金が無かつたらうとおもふを禁め得ざりき。我れの矛盾にあらず、彼れの進歩のみ。

○儲けるを知つて遣ふを知らず、斥くべし。遣ふを知つて儲けるを知らず、是亦斥くべし。さらば何とかすべき。儲けて而して遣へとは、儲けぬ人の言なり。遣つて而して儲けよとは、遣はぬ人の言なり。金ならずして斯くの如く同一なる問と、同一なる答との繰返さるゝはなかるべし。世に其問、其答の明瞭に過ぐるものは、おほむね不可能の事なり。繰返し來れる今日にありては、殊に不可能の事なり。哭にして越、火にして水を兼ねしめんとするものなり。

○使ふべきに使はず、使ふべからざるに使ふ、是れ錢金の本質にあらずや。疑義を挾むを要せず。

○一國、一家、一人を分けてもいはず、金に就て論議の生ずるは、乏き時なり、少き時なり、お恥かしくも足らぬ時なり。工夫も然り、有る時にせず、無い時にす。

○孰か我邦の現狀に見て、金は一切の清めなりといへる。諺の、遂に奪ふまじき大原理たるに首肯がざらんや。近世最も驚くべきは、科學の進みなりとぞ。

○貧人が唯一の味方は、詩人なりと。げに然らん、詩人も唯一の貧人なれば。

○畫をかく人々、字をかく人々に告ぐ。お金を拂つて買つて下さるは、まことに難有いお方なり。併しながら大抵は、わからぬ奴なり。

○按ずるに筆は一本也、答は二本也。衆寡敵せずと知るべし。

(明治三十三年十一月)